

平成22年度 キャップストーンプロジェクト

テレビ番組での敬語の不使用問題の批評 —「土屋アンナ」をケーススタディーとして

内藤 淳也

京都大学 工学研究科 都市社会工学専攻 自然・社会環境防災計画学研究室(〒611-0011 京都府宇治市
五ヶ庄)

E-mail:naito.junya.w.fd@t06.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

近年、テレビ番組で目上の人に対しても敬語を用いない出演者が見られる。このような言動に対して、それを見た視聴者の間ではインターネット上で「礼儀を知らない」という反発も起こっている。一方で、「親しみがあって良い」というように彼女の言動を支持する意見もある。このように同じ言動に対して二つの異なる反応がおこっているということに着目し、それが現代社会を考える上でどのような意味をもっているのかについて評論した。

Key Words : honorific, TV program, hierarchical relation

1. はじめに

テレビ番組を見ていると出演者が敬語を使わないシーンを見られることがある。それも若い話し手がより年長の優位な位置にいる聞き手に対してである。敬語使用の乱れは昨今よく指摘されている問題ではあり、正しい敬語の使い方について書かれた本は書店でたくさん見られる。しかし、彼らはそのような敬語の使用法の乱れとは違い、誰でも話せる簡単な敬語すら最初から使おうとしていないように見える。それは無意識にではなく何か意図を持って敬語を使っていないようにさえ見えた。加えてその振る舞いがなされているのはテレビ番組の中である。テレビ番組は放送時間が限られているので、当然起こった出来事すべてが放送されるのではなく、その中から選択されたものが放送される。その選択に際して、例えば、製作者が視聴者に見せたい映像が選ばれ、不適切と考える映像はカットされるといった製作者の考えが働いていると考えることができる。放送されるテレビ番組は事実を淡々と流しているわけではなく、製作者からのメッセージも含まれているのではないだろうか。すなわち、テレビで敬語を使用しないという振る舞いが放送されることは、視聴者、特に若い人、になんらかのメッセージを与えることになり、加えてその影響力は大きい。同じ敬語の不使用であってもテレビでその言動が行われることは普通の人が喫茶店で目上の人に敬語を用いないこ

ととは異なった意味をもつと思われる。

ここでは、そのようなテレビ番組での敬語の不使用の例として、「土屋アンナ」を取り上げる。彼女はモデル、女優、歌手であり、テレビ番組やCM、雑誌などで広く活躍している。

例えば2008年9月8日にフジテレビ系で放送された「SMA P×SMA P」でのやり取りを記す。

司会者「いまおいくつですか。お子さん。」

土屋アンナ「三歳半。」

(中略)

土屋アンナ「でも口悪い。私に似たみたい。」

司会者「アンナさん全然口悪くないですよ。」

土屋アンナ「本当？」

また出演者が作った料理を食べる際には「これ手で食べていいの？」と話している。

2008年11月10日にフジテレビ系で放送された「HEY×3」では「土屋アンナ」の紹介のために彼女との関係話を話した男性出演者は「俺の方が年上なんすけど、たまにオレ敬語交じりなんすよ」と発言していた。その一方で「土屋アンナ」は彼に対して敬語を用いている様子はなかった。当時、男性出演者は三十歳で「土屋アンナ」は二十四歳である。このことをどう考えられるだろうか。一般的に見たらこれはやはり失礼だととられるであろう。

日本では年齢というのは特に知り合い同士では依然敬語を用いるかどうかの重要な要素だからである。

このように「土屋アンナ」が敬語が用いていない場面を見た視聴者の間では彼女に対する反発も生まれているようである。しかし、中にはその態度を支持する人もいるようである。以下ではそのような視聴者の反応の例としてインターネット上の書き込みをいくつか紹介する。

インターネットのある掲示板¹⁾では「ヤンキーだから敬語の使い方知らない」「世の中で一番嫌いな女だわ」「まじで死ねばいいと思う」というような彼女を一方向的に非難する言葉が並んでいる。一方で中には、「逆に敬語だったら変だろこのキャラで」といったものや「いくら敬語使ったって中身の問題だろ」といったような彼女に一定の理解を示した書き込みも見られる。

次に「Yahoo!知恵袋」に寄せられた質問と解答を挙げる。「Yahoo!知恵袋」とは「Yahoo!JAPAN」が運営するコミュニティーサービスであり、掲示板上で利用者同士が質問したり、質問に回答したりすることで、知識や知恵を教えあうことができる。質問者「ginnihonshu」は「森泉、マリエ、土屋アンナetc.、セレブ、ハーフなら敬語しゃべらなくて良いの?それ見て、それが格好良いと勘違いするバカなガキどう思います?」と「土屋アンナ」らに非難をこめて質問した²⁾。それに対し寄せられた回答は次のようなものである。「私は大人なので、彼女達のサバサバした言い方は嫌いじゃないけど(笑)、確かにテレビに出るなら言葉遣いはちゃんとしなきゃいけないよね。テレビの影響かって凄く思うし。ハーフの人達って、大体スカウトでモデルになり、そこからテレビに出るってパターンだから、苦勞してテレビに出てるわけじゃないし、周りの人達にも散々チヤホヤされてきたんだろね。だから若干、芸能界を甘く見てるんじゃない?」

また質問者「tootaatoomasa5boo5」は語学番組に出演していた「土屋アンナ」の態度が悪いことを指摘したうえで、彼女にどうして人気があるのか分からないから教えるよう回答者に尋ねた³⁾。それに対する回答としては「カメラの前で素の自分をさらけ出しているところ」、「着飾ってないところ」が「かっこいい」、というもの等であった。

また、その他の理由としては、「タメ口の方が聞き手との距離が近くなり、親しみが出て良い」「尊敬しない人に敬語を使う必要はない」といったものがあるようだ。

「テレビ番組で敬語を使用しない」という言動は上に紹介したように多くの視聴者の反発も生んでいる。しかしその一方で、テレビ番組で見ている限り、彼女は敬語を使わなくても他の出演者とうまく付き合っているようであるし、数年間テレビに多く出演し続けてるなど、彼

女の言動はテレビに許容されている。それだけでなく、彼女の言動を支持する視聴者も多く、その言動は彼女の人気の原動力の一つにもなっているようである。このことはどのような意味をもつのであろうか。これらの現象を見ていて、ここに敬語をめぐる現代社会の深い構造が潜んでいるのではないかと感じとった。そこで、このようにテレビ番組で敬語を使用しないということが起きている現代を評論することにした。

まず、2章で敬語の役割について述べ、敬語はどういう状況で使われるのか、敬語を使わないことにより何が失われるのかを確認する。そして3章で敬語を用いるかどうかを決定づけると考えられる上下関係の変化について考え、それに伴う敬語の使用の変化について述べる。同時にテレビにおける上下関係について考えるためにテレビの位置づけについて考える。そして最後に4章でテレビでの「土屋アンナ」の敬語の不使用について考察する。

2. 敬語の役割

2007年に文部科学大臣の諮問を受け、文化審議会が答申した「敬語の指針」⁴⁾では、敬語の役割は、「人が言葉を用いて自らの意思や感情を人に伝える際に、単にその内容を表現するのではなく、相手や周囲の人と、自らの人間関係・社会関係についての気持ちの在り方を表現することである」とされている。ここでの「気持ちの在り方」とは、「立場や役割の違い、年齢や経験の違いなどに基づく「敬い」や「へりくだり」などの気持ち」、その場が公的であるか私的であるかなど、その場のあらたまりについての気持ちのことである。また、敬語を使用するかどうかは親疎関係によってや、恩恵、利益の授受などで使い分けられる⁵⁾。

「敬語の指針」では留意しなければならないこととし、敬語は人間関係に対する思いを表現するが、それは話し手が意図するかしないかにかかわらない、ということが挙げられている。つまり、敬語を用いなければ用いたときは異なる人間関係が表現されることになる。敬語をどのように用いるとどのような人間関係が表現されるかについて留意することが必要であると同時に、敬語を用いない場合にはどのような人間関係が表現されてしまうかについても十分に注意することが必要である。

また井出が指摘するように、敬語はこのような上下関係、親疎関係、場のあらたまりだけではなく、話し手自身についての情報として品位を表すとされる⁶⁾。聞き手が目下の人間である場合でも敬語を使うことがあるが、そのような敬語は話し手に品性や嗜みが備わっているこ

とをを表す。女ことばを聞いた聞き手が、話し手は女性であると判断できるように、高度な敬語を聞くと、聞き手は話し手に品位を感じ取る。敬語はかつて社会的階層方言であったため、階層が上の人を使う言語形式が、高いレベルの敬語表現であった。そのため、程度の高い敬語を使う人の属性には品位や威厳があることが多いと現在でも考えられる。そして、「敬語の指針」にあるように各人が責任を持って自由に言葉を選択していく以上、当然間違った使い方をしたとき、話し手は品位に欠けるとみなされてしまう。

金田一は「文法は民族文化であるから、民族の個性によって成立する」と述べている⁷⁾。また、長谷川は「コミュニケーション行動が長年繰り返され、蓄積されて形成されたものが『文化』である」と述べて、文化とは我々の生活の総体系であり、われわれも文化により常識、物の考え方、価値観、そして個人の自己感などの生活の根幹となる部分も影響を与えられることを指摘している⁸⁾。例えば日本の文化の特色として、相手を立てるといふ謙譲の美德、内か外かの区別、肯定が多く否定が少ない、はっきりと言わずとも察することなどを挙げることができるが、これらも言語、特に敬語と強く結びついていると考えられる。言葉と文化は切っても切り離せない関係にあり、敬語も文化を支えているものの一つであるのだ。敬語の使用の仕方を変えることは、これまで社会の調和を守ってきた文化を変えることにつながるということに配慮することが望ましいと思う。

「ことばは社会のインフラを支えるものである。ことば遣いの在り方が相互尊重原理に基づいていけば、その社会は相互尊重をしながら人々がコミュニケーションする社会となる」と井出は述べている。また、飛田は「敬語はコミュニケーションの潤滑油と言われており、その適切な使用は心地よく、会話も弾み、それによって仕事の能率も上がるようである」と述べている⁹⁾。その場の上下関係が守られることでコミュニケーションがより豊かな社会がつくられ、団結力を高めることで経済的にも精神的にも豊かさにつながると考えられる。

現代は、情報化・都市化・国際化などにより、かつてよりも多様化・複雑化した人間関係がある。そのため、現代社会のコミュニケーションでは敬語の重要性はより高まっていると考えられる。コミュニケーションを円滑化し、確かな人間関係を築いていくために、これからも敬語は有用であると考えられる。

3. 対人関係における上下関係の変化と言語変化

前章の議論に基づく敬語を使用するかしないかは話

し手が思っている聞き手との関係に依存することになる。それを踏まえると、はじめに述べたような目上の人に敬語を用いないという現象は、上下関係の希薄化によると推察される。そこで、本章では現代の対人関係における上下関係の変化について述べようと思う。

日本は特に欧米などの国々と比較して縦社会であるとよく言われるのを耳にすることがある。しかし、それも社会情勢の変化に伴って変わりつつあるようである。開国以降、敗戦や90年代以降の経済の行き詰まりなどによって、事あるごとに日本は欧米化してきた。欧米は日本と比べて相対的に上下関係が弱いとしたら、欧米化の反映として、日本でも上下関係が弱くなっているのではないだろうか。

上下関係が希薄化した例としてはまず親子関係を挙げることができる。「友達親子」という言葉が使われ、テレビや雑誌等で取り上げられた。これは例えば母親と娘が友達のような仲で、共に買い物やファッションを楽しむ親子のことなどである。親子が友達のような関係で、親に権威がなければ親は子を叱ることができず、賛否両論あるようである。多かれ少なかれ、かつてのように子供にとって親は権威的な存在でなくなったことは指摘できるように思う。

また、先生と生徒の関係も変化したように思う。先生は生徒にとって尊敬されるべき存在であると思っている人の数は減っていると思われる。「友達先生」という言葉もあるようだが、生徒に友達のように接する先生もいるようである。また、我が子のために教師に無理な要求をする、いわゆるモンスターペアレントがマスメディアで社会問題として取り上げられたが、このような存在が意味するのは生徒の保護者も先生が特別な存在ではないと考え、敬意を抱いていない人が増え、先生の権威が喪失しているということではないだろうか。

このような実社会での上下関係の変化に伴って敬語の使用の仕方は変化していると考えられる。上下関係は従来は身分の別によるものであったことは前にも触れた。しかしながら、現在では身分制度は存在せず、よって上下関係は流動的なものになっている。このことは「敬語の指針」でも指摘されているが⁴⁾、敬語が表す「気持ちの在り方は」決して固定化した絶対的なものではなく、会話の中でもその時々が変わっていくものである。敬語を用いる際の判断基準は上下関係であるとしてもそれは身分という絶対的なものではなく、その状況での立場や役割の相違という相対的なものへと変化したと考えられる。親に敬語でしゃべる子供は少数派であろうし、「友達先生」の例でも生徒は先生に敬語を使わないようである。

今回取り上げている敬語の不使用という現象は、ここ

で述べたような対人関係における上下関係の希薄化を背景として起こっていると考えられる。

はじめに述べたように、今回考えている問題はテレビ番組における敬語の不使用についてであるので、テレビにおける上下関係について述べる。社会で上下関係が希薄化した影響として、テレビ番組中でも上下関係が希薄化すると考えられる。テレビは社会を写し、社会に影響を与える両者には相互関係があると考えられるからだ。

加えて、現代のテレビ番組はバラエティ番組などの大衆娯楽番組が中心であり、「土屋アンナ」が出演しているテレビ番組もそのようなものが多い。そのような番組では特に強い上下関係は存在しにくいと思われる。

「土屋アンナ」の言動がテレビで許容されているということも現代社会で、そしてテレビ番組中でも上下関係が希薄化していることの証左である。

4. 考察

上下関係が希薄化しているという背景に加えて、バラエティ番組が増加し、テレビ番組全体のレベルが下がるなど、テレビが凋落しているという事態があるにもかかわらず、テレビ番組内で敬語がそのまま変わらずに残っているとすると、このことは不自然とも言えるのではないだろうか。テレビ番組の中ではテレビ文化に合ったような敬語の使用方法があるのではないだろうか。しかしながら、現実には「土屋アンナ」の言動に対して反発が起こったことから分かるように、テレビ番組で敬語を用いることは、現在もなお規範であり続けているようだ。「土屋アンナ」がテレビ番組で敬語を用いないとき、彼女の言動はそのような現状に対するツッコミになっていると考えられる。

それが彼女の期待通りであるかどうかは分からないが、尊敬していない他者に対して、尊敬しているかのように敬語を用い、相手と距離をとり、そのままやり過ごすよりも、例え相手に何と思われようとも、ストレートにぶつかることにより、新しい人間関係ができる。上下関係が次第になくなってきていることを踏まえて、もっと互いに尊敬し合える社会を作っていこう。彼女の言動にはこのような意図があると捉えることもできる。彼女に惹かれている視聴者は彼女のそのような部分に魅力を感じ、支持しているのであろう。このように考えると、「土屋アンナ」が広く受け入れられているのは彼女の言動が視聴者の潜在意識を代弁しているからだと思われる。

また、はじめに紹介したように「テレビに出させてもらっているのだから敬語を用いることは当然である」というような声もあるが、そのように感じる視聴者は恐ら

く「土屋アンナ」のことは批判するが、テレビに対しては好意的であり、テレビはなおも偉大なものであると考えているのであろう。「土屋アンナ」を批判している視聴者の声を見ていくと、現代のテレビを無批判に受け入れている視聴者の存在も浮き彫りにされている。

参考文献

- 1) <http://unkar.org/r/livecx/1221136254> 2011年1月5日閲覧
- 2) http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1049897765 2011年1月5日閲覧
- 3) http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1110845161 2011年1月5日閲覧
- 4) 文化審議会、『敬語の指針』、2007年
- 5) 井出祥子、『わきまへの語用論』、大修館書店、2006年
- 6) 菊地康人、『敬語』、講談社学術文庫、1997年
- 7) 金田一京助、『日本語の変遷』、講談社学術文庫、p 113-114、1976年
- 8) 大坊郁夫、永瀬治郎、『講座社会言語科学第3巻一関係とコミュニケーション』、ひつじ書房、2009年
- 9) 飛田良文、『日本語行動論』、おうふう、2001年